

# 献 辞

文学部長 岩 津 洋 二

藤間繁義教授は、本年3月末日をもって定年を迎えられ、桃山学院大学を退職されることになりました。

先生は、海軍兵学校や工業専門学校などに在籍されたあと、1949年立教大学文学部キリスト教学科に入られてから今日にいたるまで一貫して、キリスト教研究者として、キリスト教のボランティア活動家として、また篤実なキリスト者として、多くのはたらきをされてきました。

神戸松蔭女子学院短期大学などの教員を経て、創設後2年経った1961年4月に、専任講師として桃山学院大学に就任されましたが、その後、助教授・教授に昇任され、桃山学院大学の草創期以来36年間、大学の精神的なバックボーンとして、公私を問わず、大学の発展のために献身的に尽くしてこられました。桃山学院大学にたいする愛校心の熱烈さにおいて、先生はつねに第一人者でした。

先生の裏表のないお人柄や、学識と体験と実践に支えられた篤実な信仰は、先生と接するだれにも感動を与えるものでした。先生を知る人で、先生のお人柄について悪口を言う人に出会ったという記憶がありません。きわめて希有のことです。

先生のご研究の中心的なテーマは、エキュメニカル・ムーブメントにかかわるものでしたが、先生にとって、これは単なる学問的な関心の対象であっただけでなく、人々をつなぎあわせる絆となろうとする先生の生き方にかかわることでもあったようです。だれもが先生を敬愛し、信頼していたのは、このように学問と人生とが深く結びついていたからこそだろうと思います。

先生が教育熱心であったことはあらためて申すまでもないことでしょう。それも、教室の中で教えるだけでなく、自分のもっているすべての時間を使って学生に接することを厭われることがありませんでした。先生は、長い間、登美丘キャンパスの構内にある宣教師館で生活しておられましたが（学生運動によってキャンパスが封鎖されていたときにさえ）、このこともつねにだれにたいしても愛情をもって接するという先生の姿勢を端的に示すものであったと思われます。

学生寮寮監，アメリカンフットボール部部長，ワークキャンプ団長など，先生が献身的に力を注いでこられた諸活動も多くあります。先生のご指導を受けた多くの学生たちが，卒業後も親しく先生のもとに集まってくるのも，先生の愛校心の熱烈さに共感するからであります。

やむを得ないこととは言え，定年によって心から信頼しうる先生をお送りしなければならないのは，つくづく残念なことです。

桃山学院大学では，わずかながらでも先生のご功績に報いるために，「桃山学院大学名誉教授」の称号を贈り，キリスト教学会の学会誌『キリスト教論集』の一卷を「藤間繁義教授退任記念号」として刊行し，先生に献呈することにいたしました。

先生におかれましては，ますますご健康に留意され，さらなるご活躍をなさいますようお願い申し上げます。それとともに，後進にたいしてこれまでと変わらぬご指導を賜りますよう，お願い申し上げます。

1997年 3 月